**薄田　斬雲 （うすた・ざんうん）**

**１、プロフィール**

小説家、伝記作家。明治末期新聞記者となり、小説・戯曲を自然主義的時流の中で発表。また、記者体験から歴史・伝記への関心を深め、豪傑的人物を描く道へ転換していった。

＜生没＞

1877（明治10）年１月27日 ～ 1956（昭和31）年８月５日

＜代表作＞

伝記『天下之記者（山田一郎君言行録）』

随筆集『片雲集』

伝記『頭山満翁一代記』

＜青森との関わり＞

弘前町（現弘前市）生まれ。画家野沢如洋、柔道家前田光世の伝記、『希望の弘前』などで郷土愛を示した。

**２、作家解説**

本名貞敬。明治10年１月28日、弘前町蔵主町（現弘前市）に、父貞一、母しまの長男として生誕。23年青森県尋常中学校（現弘前高校）入学（28年卒業）。32年東京専門学校(現早稲田大学)文学科選科を卒業。京成日報記者、早稲田大学出版部編集委員となる。

39年「虚栄の巷」、40年「平凡な悲劇」、42年「山上の舞妓」、大正元年「悪党」、２年「船頭」などの小説の他､戯曲・随筆を自然主義の舞台「新小説」「早稲田文学」をはじめ、「東京二六新聞」「読売新聞」などに発表。しかし文壇の退廃性にあきたらず、国家、社会への関心（玄洋社・黒龍会や社会主義者木下尚江などへの接近）を深め、転換を図る。

39年の『天下之記者（山田一郎君言行録）』随筆集『片雲集』､41年の評論『暗黒の朝鮮』45年の『世界横行武者修行(前田光世通信)』、大正５年の『羅馬史』､７年の翻訳『日本の戦略』（フレデリック・ステーナー原著）などは、転換の方向を物語っている。

こうした方向の延長上に、昭和２年の『半峰昔ばなし（高田早苗自叙伝）』、５年の『豪侠画人野沢如洋』、12年の『頭山満翁一代記』などの伝記作品がある。

戦中の疎開に続く在郷中に、戦後の郷土の復興の指針を示した『希望の弘前』（昭和24年６月）は、郷土の歴史や人生を回顧しながら、ひとびとを激励するところ大であった。

**３、資料紹介**

〇『片雲集』

図書

1906（明治39）年８月25日

185mm×130mm

随想集。坪内逍遥の序。また、自序で「此の書を謹んで満天下のユーモア趣味ある愛読者に呈す」と記す。「無味録」「半可通」等37篇の文章を収める。